

学部留学生の自律的学習能力向上支援を目指す日本語教育方法の探索：メタ認知の活性化を促す学習活動を通して

長谷川， 順子

<https://doi.org/10.15017/2534368>

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	長谷川 順子			
論文名	学部留学生の自律的学習能力向上支援を目指す日本語教育方法の探索 —メタ認知の活性化を促す学習活動を通して—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	教授	井上奈良彦
	副査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副査	九州大学	非常勤講師	因 京子
	副査	東京海洋大学	教授	大島 弥生

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の大学で学ぶ学部留学生の自律的学習能力の向上を支援する日本語教育方法を開発することを目的とする研究である。留学生対象の日本語科目の授業に自律的学習能力の向上に有効とされているメタ認知の活性化を促す活動を組み入れ、継続的に活動内容や方法を改善しつつ結果を観察するとともに、受講した学習者の認識と行動を質的に調査して、方法の妥当性を検証した。以下、論文の概要を示した後、論文審査の結果をまとめる。

第1章では、本研究が必要とされる背景と目的を述べ、探索方法を示した。

第2章では、学部留学生の自律的学習能力の向上を支援する活動を考案する前提として、関連する主要な研究を概観して課題を認識するとともに、留学生の持つニーズと可能性を明らかにした。まず、「自律的学習能力」という概念を検討し、その中核要素とされる「メタ認知」を活性化させるには「ストラテジー」の知識・技能の向上と自己の学習を捉える「内省」の促進が必須要素であることを論じた。また、学部留学生に提供される「アカデミック・ジャパニーズ教育（以下、AJ教育）」が目指す「市民としての力」は、「学士力」の中心概念である「生きる力」に通底し、「自律的に学ぶ力」が必須要素であることを確認した。こうした認識に基づく実践研究が既に行われ、教育方法開発への示唆が豊かに提供されているが、ストラテジー指導と初年次段階のメタ認知の発達を継続的に観察して効果を検証することは、いまだ試みられていなかった。一方、学部留学生に行った実態調査結果から、自律的学習技能を伸ばす必要があることが明らかになった。以上の検討から、本論文では、「メタ認知」の活性化を目指し、その直接的表れの一つと見なされる「学習ストラテジーの理解と行使」とメタ認知の発達を促す「内省活動の実行」を基本方針として、それに資する学習活動を考案、実行し、学習者の認識と行動の変化を観察してその効果を検証することを目的とした。

第3章では、上記の基本方針に基づいて開発し、2014年度から2017年度の4期にわたり行った学習活動と教材等を示し、アクション・リサーチの経過を報告した。某国立大学工学部の学部留学生対象の日本語科目において、「学習ストラテジーの理解と行使」と「内省活動の定期的実行」を必須項目としつつ、当該学期の受講者のニーズと各期の実施結果の分析をもとに調整しながら実践した結果を観察した。その上で、4期にわたる実践の総合的分析に基づき、学習活動形態、学習素材、学習者への対応の3点から、望ましい支援の方法について考察した。

第4章では、当該科目の実施中及び終了後に得られたデータをもとに、授業に組み入れたメタ認

知活性化を目指す活動の妥当性を検証した。学習者が毎回の授業の最後に記述した内省文を主要データとして実施中の学習者の認識や行動を分析し、学習活動への動機の継続と学習に関する気づきの状況を観察した結果、概ね望ましい方向への変化が起こりつつあることが捉えられた。科目終了の約2週間後と約半年後に協力者に対して行った半構造化面接調査結果の分析から、科目中に捉えられた肯定的な変化が終了後の日本語科目以外の科目や他の活動へも波及していることを確認した。加えて、学習者の内省文に行った教員のフィードバックを分析し、継続的なフィードバック活動が学習者のメタ認知を活性化させただけでなく、教員自身の内省にも肯定的な影響を及ぼした可能性を捉えた。以上の検証から、基礎的学力が高く主体的な学習能力を備えていると見られた本コースの留学生にとっても、意識的にメタ認知の活性化を促す活動が「学び方」を拡張する契機となり有益な影響を及ぼしたことが観察され、本研究が、これまで積極的な援助方法の考案が等閑視されがちであった高いレベルの基礎力と意欲を有する学習者を対象とした日本語科目のコース・デザインの開発に寄与したと考えられた。

第5章では、研究成果をまとめ、残された課題を総括した。4年間の教育実践結果から、本研究で行った「メタ認知の活性化」を主眼とする支援方法が概ね肯定的な結果をもたらすという成果を得ることができた。自己主導型の学習への適応が速やかに進まない学習者へのよりよい支援方法、特に教師の直接的関与の適切な質と量については、今後も継続的に観察と検証を積み重ねていく必要があるが、本研究で行った教育活動が学部留学生の自律的学習能力を向上させる有効な方法であることを実証することができた。

論文審査の結果、本研究が設定した「自律的学習能力向上の支援」という目標と、「メタ認知の活性化」を主眼とする支援方法は概ね妥当であり、自律的学習能力を高めることに役立つことが実証されたという点については、審査委員全員の意見の一致するところであった。また、本研究では、対象とした学生数が限られ、かつ比較的基礎力の高い学習者に限定されてはいたが、その基礎力の高さゆえに自助努力に期待される傾向があった学習者も援助を必要としており、彼らが必要とする援助を提供することによってより高い成果が得られることを明らかにした点は、本論文の高く評価できる点である。さらに、本研究の成果は、学部留学生への日本語教育方法として広く応用され得るものであり、学部留学生教育の質の向上に一定の貢献をなしたと考える。よって、論文調査委員会は、本論文を博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。